

五都市(上海・南通・揚州・鎮江・無錫)周遊 (5) 最終回

寺西 俊英

市の最後の訪問地の北固山から金山に戻る途中にある「西津渡街」から書いていきたい。この旅行記も年が改まり、今回のご紹介は、昨年 2018 年 5 月 22 日の続編である。「津度」とは、川の渡し場のことである。昔は西津度から対岸の揚州方面への渡し場が設けられていた。三国時代(220年～280年)には「蒜山渡」と呼ばれ、唐代(618年～907年)には「金陵渡」と名称が変わり、「西津度」と呼ばれるようになったのは宋代(960年～1279年)以降である。しかし、清代以降は長江の流れが北側にあたる揚州側に湾曲して流れたことにより、南側の鎮江市は土砂の堆積で浅瀬が拡がり西津度の港は内陸になってしまった。唐代には李白や白居易、そして宋代にはマルコポーロが訪れているが、宋の時代の街並みがそのまま残っているため別名「宋街」と呼ばれている。マルコポーロの見た西津度の風景が現代でも見られるということである。

バスから降りたところからガイドの案内で当時の街並みに入っていくと、平坦な石畳の道が続いている。そのうちに坂道となったがこの場所に道に沿って幅 1メートル程の大昔からの時代毎の西津度の港の高さが見られる遺跡があり、上部をガラスで覆っている。大昔はこの場所でも水深が随分あったことがこれから分かるが、数百年単位の階段状の遺跡は珍しいのではない。さらに進むと幅 3メートル位の石造りの階段の向こうに、この街の一つのシンボルであるチベット仏教の石塔と仏塔が見えてきた。両サイドは石垣やレンガ塀でレトロな感じの雰囲気である。石段の中央部分は幅 50センチくらいの一輪車が通れるように坂道が造ってあり、港で陸揚げした荷物の運搬に使った。石段を登りきるとまた平坦な道になった。すると急に場違いとも思えるモダンな 3 階建ての建物が見えてきた。旧イギリス領事館である。アヘン戦争終結時、1880 年に中英間で結ばれた南京条約により鎮江は開港させられ、イギリスはこの地に領事官を設けたのである。今は鎮江博物館になっている。イギリスの横暴ぶりが想起される。

さて鎮江の最後に「鎮江香酢」を紹介したい。揚州の名物と言えば、「揚州チャーハン」と「揚州獅子頭」という肉団子を紹介したが、鎮江の名物は「香酢」で、中国人ならみなこのお酢を思い浮かべるといふ。香酢



鎮江の旧英国領事館

は、長期間(5～8年)熟成させることによりアミノ酸含有量が多くなり、日本の黒酢の 10 倍以上、米酢の約 20 倍もあると言われている。免疫力の向上、成人病の予防、美肌、若返り、ダイエットの効果があるとの説明があり、ツアーの何人かは鎮江香酢をお土産に買いこんでいる人もいた。

午後 4 時前に全員バスに乗って無錫に向かって出発した。150 キロ弱の行程で午後 5 時半過ぎに無錫市内の「無錫恒通花園酒店」に到着した。6 時半から 3 階の半島の間で豪華な夕食を摂った後、わりりの友人 4 人で夜風に吹かれようと外に出た。少し歩くと大きなスーパーの前に出た。看板には大きな文字で METRO とある。この名はどこぞで見たような気がしたが思い出せない。そこに入ることにして、食後のデザートとお土産を物色した。紹興酒などを求めレジで代金を払うとレシートにこの店は中国語で「麦得龍」と書かれていた。



5 月 23 日(水)の夜が明けた。この旅も終わりに近づいている。時間過得真快だ。

無錫はご存知のように、無錫旅情の歌詞にあるように太湖の北の端に位置している。3 千年の歴史を持つ古い町で、中国では「江南之名城」と言われ、またその豊かさから「魚米之郷」とも呼ばれる。昔は大量の錫が採れたが漢代に掘り尽くされ、「無錫」という名が付いたと言われる。

ところで「太湖」は太古の昔、東シナ海の一部であった。しかし長江と銭塘江が運ぶ土砂で沖合に平野が形成されたことにより、内陸部に位置するようにな

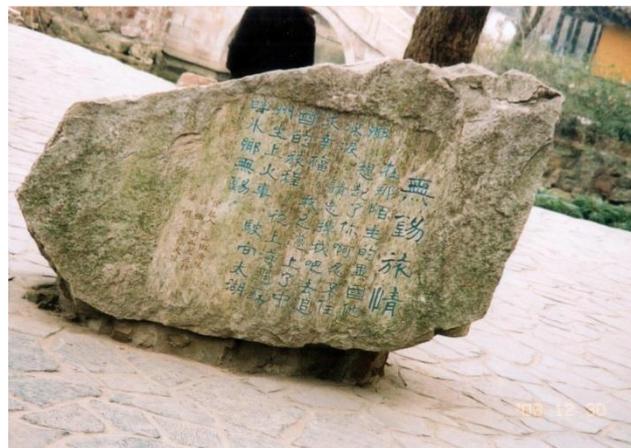


太湖仙島にある老子像

った。その後流入する河川により淡水湖となった。中国五大湖の一つで、三番目に大きい淡水湖である。面積は 2250 平方キロで東京都よりやや大きい。これまで見てきたように中国の大河の運ぶ土砂の量は半端なものではない。遠い将来、渤海湾は黄河により埋め尽くされ平野となり、また九州との距離は長江により指呼の距離になるかも知れない。

ホテルを 8 時半に出発し、「太湖鼈頭渚」に向かう。無錫の名勝の一番の人気スポットである。ここは無錫市街から西側の太湖に突き出た小さな半島にある公園で、巨大な岩が頭をあげたスッポンに似ていることから付けられた名前である。亀 (guī) の字に似ているが鼈 (yuán) は、大型のスッポンのことだ。この半島によって区切られたような細長い湖を「蠡湖」と呼ぶが、その一角にある「蠡園」は風光明媚なことで知られる。名前の由来は、春秋時代越王・勾踐の家来で呉王・夫差を倒すのに功績のあった功臣の范蠡(はんれい)が、官を辞したあと天下の美女・西施とこの地で過ごしたという逸話からという。

我々が訪れた日は快晴で公園を海沿いに歩いて行った。湖面は太陽の光で輝きまるで一枚の巨大な鏡のようである。太湖と言えば「太湖石」である。太湖に臨む大きな太湖石の石碑のそばに来た。石碑には中山大三郎氏が作詞・作曲し、尾形大作が歌った「無錫旅情」の歌詞が刻まれていて旅情を誘う。この歌がヒットしたのは今から 30 数年前の 1986 年のことである。この場所からまもなく遊覧船乗り場に到着した。我々は遊覧船に乗り込み遙か沖合に小さく見える「太湖仙島」に向かった。太湖仙島は別名を「三山」という。歌にある、〈♪はるか小島は三山か〉の三山で仙島は三つの小さな島から成っている。10 分くらい乗ったであろうか。波止場に着き、そこからしばらく歩くと島の中央に道教寺院が現れた。入り口の壁に「至虚無上」とい



太湖石に刻まれた「無錫旅情」歌碑

う道教の言葉が書かれている。中には大きなものは何でも好きな中国らしい見上げるような仏像がありとても見ごたえがある。そこから沿岸に出ると、これまた巨大な釈迦像、老子像、孔子像と中国における 3 大宗教の人物像が並んで置かれている。ありがたみはあまり感じないが、一見の価値はあった。島で 1 時間半くらいあちこち見学した後、11 時半頃また船に乗り戻った。皆バスに乗り「紫雲鮮館」というホテルで食事をとった。無錫について最後に一つ書き加えたい。町田市のお隣の相模原市は、無錫市と 1985 年に友好都市締結を行った。それから 30 数年経過しているが、毎年のように相互訪問を重ねている。しかし友好都市というものは一朝一夕に締結できるものではない。中華人民共和国が成立し、8 年後の 1957 年に当時の中国政府の王震農墾部長（後の国家副主席）が農業視察で相模原市を訪問し、これがきっかけとなり交流が始まったのだ。実に 60 数年の交流である。政府間ではいろいろあるが、やはり民間交流はとても大切である。

食後、午後 1 時に出発。一路上海に向かった。途中、陽澄湖サービスエリアでトイレ休憩。このサービスエリアは何度も利用したので懐かしい。上海は過去何度も書いたので、以下簡単に触れたい。15 時半に豫園に到着。入場料は 40 元であったが、60 歳以上は半額なのでパスポートを見せて 20 元で入場した。夜は黄浦江遊覧。翌 24 日は、午前中は、上海博物館に行き 2 時間ゆったりと鑑賞した。昼食は博物館から歩いてすぐのレストランに行く。食後 12 時 45 分出発、途中お土産を見たいという要望に応じてスーパーに立ち寄りし、午後 2 時に上海浦東飛行場に着いた。飛行機は 18 時 30 分の MU575 便である。16 時半頃 17 番搭乗口に集合。羽田には 20 時 50 分過ぎに無事着陸した。2 時間 10 分のフライトであった。思い出多き旅であった。

(おわり)